



連城義書  
廿九

特別
14
696
129



696  
129

皇朝文獻

目錄

- 一 卷一 詩物類 宣和八年
- 一 卷二 詩狂言百首 宣和十三年
- 一 卷三 詩德翁家集 唐應三年
- 一 卷四 詩川上遊藝書合
- 一 卷五 詩道教訓了也條
- 一 卷六 詩海邊道之紀
- 一 卷七 詩心之字彙了也一類
- 一 卷八 詩東宮龜池亭
- 一 卷九 詩藏卷開卷

皇朝文獻  
 皇朝文獻  
 皇朝文獻

其の次第に...

はるかに...

是の...

その...

人...

其の...

その...



世のこころいふまに  
小のこころいふまに  
何ぞかまはるるに  
何ぞかまはるるに

とては

足下... 白... 山... 柳... 花... 婿... 聲...











おのれの如く... 是よりある... 唯は... 其夜半... 貴血や... 病の深...

おのれの如く... 是よりある... 唯は... 其夜半... 貴血や... 病の深...







































貞德狂歌百首

全

貞德



若菜

~~~~~

弦雪

~~~~~

梅

~~~~~

柳

~~~~~

早蕨

~~~~~

櫻

~~~~~

梅

~~~~~

春雨

~~~~~

山吹

~~~~~

雪

~~~~~

苗代

水邊よりいづれも好む人の命はほろひ草代

草

或は如き草といふと年々より多かるべし

杜若

棠平の折白の芳の心もなほ

藤

多葉をとり柳をとりて又藤をとりて

款名

や海の方の花の命の丸を<sup>アサヒ</sup>はか

三月盡

いふはいづれもいづれもいづれも

夏十五首

更衣

花邊よりいづれも好む人の命はほろひ

卯花

うの花といふはいづれも好む人の命はほろひ

葵

始りいづれも好む人の命はほろひ

舞之

其の夜時をみえしうらむ敷居すしつて得せし由也  
葛蒲

切きりしつらむもあはれは股の里に別居かた  
早苗

若くして蟻のうらむはあはれ西のむらこめり  
照射

的うらむの影をたのむるの里に別居かた  
みけあ

吉野の物浮はあはれ<sup>手すく</sup>膚之水はあはれ<sup>手すく</sup>育あはれ  
そと橋

海はあはれぬまう<sup>カキコト</sup>橋を白くしつて其の葉あはれ

玉うらむ<sup>手すく</sup>夜毎に<sup>手すく</sup>いひまはるのそりかた

燈を<sup>手すく</sup>追はれしつてあはれ<sup>手すく</sup>いひまはる

極果<sup>手すく</sup>のいひまはる<sup>手すく</sup>いひまはる<sup>手すく</sup>いひまはる

あはれ<sup>手すく</sup>いひまはる<sup>手すく</sup>いひまはる<sup>手すく</sup>いひまはる

泉

香たをく時鳥セウノウのさびしき鐘の音は月をうつせむ

ナニシノノウヤ  
荒和後

諸人あはれぬものぞ秋神の御やみきりし所

秋廿首

五好

涼しき空をこぼるる夕暮の華の風のちびしとれを

七夕

この川を渡るは花をみるにやうに空を散る花の情

秋

花如佛のさきと花の花とれをこぼるる夕暮の秋

秋花

花をみるにやうに空を散る花の情

秋

花をみるにやうに空を散る花の情

秋

古の及る頃をみるにやうに空を散る花の情

蘭

くはふるが白く是をやらうに空を散る花の情

秋

空を渡るは花の如く花の如く花の如く



雁

人乃きく身あはれんはしむるはむら

二展

物音はあはれぬはむらあはれぬはむら

三露

育あはれはむらあはれはむら

四号

佐多あはれはむらあはれはむら

五橙

いふれはむらあはれはむら

新近

おぼろはむらあはれはむら

月

月夜あはれはむらあはれはむら

携衣

はらのあはれはむらあはれはむら

虫

たぬはむらあはれはむら

菓

きしのはあはれはむらあはれはむら

おぼや

清く世を去るるは人の世の常なり

九月廿四日

あまのついでに心をなやませしむ

冬十五首

初冬

冬もゆくはゆきかたのSenjimon

時由

花の文のうらやまはなほ

おぼ

花のうらやまの世に

おぼ

花のうらやまの世に

おぼ

花のうらやまの世に

おぼ

花のうらやまの世に

おぼ

花のうらやまの世に

おぼ

地獄よりあつては業此と見えん人のあつた

水鳥

水鳥の音は水鳥の聲は水鳥の聲は

細代

細代は水鳥の聲は水鳥の聲は

神樂

神樂は水鳥の聲は水鳥の聲は

雁鳥

雁鳥は水鳥の聲は水鳥の聲は

山鹿

山鹿は水鳥の聲は水鳥の聲は

埋也

埋也は水鳥の聲は水鳥の聲は

降夜

降夜は水鳥の聲は水鳥の聲は

二十首

初

初は水鳥の聲は水鳥の聲は

名

名は水鳥の聲は水鳥の聲は

不遇

予は此日就ちては月夜に宿るを思ふ

神を

きつねを思ふ我が早鐘の音も聞かぬ

後刻

名乃はしは宿るを思ふ

過ぬ逢

予は此日就ちては月夜に宿るを思ふ

旅

我は此日就ちては月夜に宿るを思ふ

思

おのころ大石のしるしを思ふ

片は

百乃おのころ大石のしるしを思ふ

眼

らあおのころ大石のしるしを思ふ

籠中書

暁

小東のあつたあつたを思ふ

松

誰より心算の老をせしむるに事あり 十年のり

世の草をたれども 竹の節用をまゐり

竹

山はよもやの海にまはれり 山はよもやの海にまはれり

山

人よりたれども 山はよもやの海にまはれり

山

若人の海をくも 東の代に万のたつたのり

海

功者虎初心との眼かたし 功者虎初心との眼かたし

野

唐國の地をぬき 唐國の地をぬき

園

の羅や今海か 古の代にたれども

橋

道照の心算の老をせしむるに事あり

海

かへん心算の老をせしむるに事あり

旅

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

別

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

山家

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

田家

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

懐旧

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

夢

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

夢

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

述懐

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

秋

あまのさかきをたぐひてしるすまはるるのたぐひ

寛永十三年九月

貞德為家集

心



一 清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

二 清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

三 清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心

清い海を渡る舟の心















道遊軒松永貞德

明心居士

張頭唐

務列子撰成主松永承種子

實入松永路心子也

那諾中真閑基

九条園白取山

分子

著述書

那諾御全奉

池式

天水抄

全

千五百善歌今抄

徒然草抄

二卷

白鳥羽實相

其有

其乃在屋の流

鳥冠井全境流平人貞徳門人

増河院艶書合

内々殿上人の御書に  
けしきのみよみ  
大納言公實



景あきいしるらん  
大納言公實

因防日記

いふはかきあのみま  
にやちんをのふし  
年ぬもいふまをぬ  
年ぬもいふまをぬ

源中納言国信

ゆらぬ水を原の川のむら  
ゆらぬ水を原の川のむら  
ゆらぬ水を原の川のむら  
ゆらぬ水を原の川のむら



之

院大進

あはれに治るるをいふは

元大弁

海軍の事

女御成申上

此の御事

宰相中納言

是の御事

是の御事

前母院

又た

宰相

此の御事

刑部卿

此の御事

刑部卿

此の御事

中納言

此の御事

中納言

此の御事

中納言

此の御事

中納言

也

一三ノ紀行

昔もさうだうの處の地は、神の御座りしを、

四佐申の御時

その處を相承するに、此の地を、

由流、安藤君

正徳四年、元元、此の地を、

後、月、二、日、

又、此の地を、

又、此の地を、

又、此の地を、

飛鳥

都、此の地を、

大和

此の地を、

申宮、上巻

此の地を、

也

此の地を、

此後、君

此の地を、

中、細言

此の地を、

由、御、御、御

此の地を、

大、兵衛、氏

此の地を、

同防同符

今これぬ油を多めせしむるは

宰おせぬ

北の山のりはあはれおほひの

一条の紙付

うらふのりあるを今とまに

義化舟

野にすまふ小夜の来しを

前赤院一休君

あふまふのりあはれおほひ

刑部卿

あふまふのりあはれおほひ

白木宮甲斐

うらふのりあはれおほひ

左京権左衛門

あふまふのりあはれおほひ

小大進

あふまふのりあはれおほひ

権中納言俊忠

あふまふのりあはれおほひ

紀の君

あふまふのりあはれおほひ

権左衛門尉

あふまふのりあはれおほひ

あふまふのりあはれおほひ

あふまふのりあはれおほひ





御  
せんおのり

らたの... 命の... 油の... 年... 御

御  
ち... 御

と... 御

御  
油... 御

御  
御

御  
御

御  
御

御  
御

御  
御

御  
御

御  
御

御  
御











教訓十五箇條

一 歌道以實為專 要儀常 志即有處 了了了了

一 吾原極黃川 三氣抄 何もなき 信 汝にたのぶし

一 割詞先達 加難詞 ありき 是原と申し

一 聖古の景 初風録 也ききみく だて申さるる心 汝

記すていしきか 習得中の一の事

一 初心開早 吟むる 終りぬ 紙燈子 一夜百首 志意違ひ

る ぬるるる 最と物もいふ 況介 幸甚きし 心ぬたふきり

らむつら 最 又君の心 道なき 心あり 一首も 筆を

らむる 心

一 初心開教 心なき 物事を 海の心し 志意違ひ 志意違ひ

心なき 志意違ひ 志意違ひ 志意違ひ 志意違ひ 志意違ひ













一  
と  
た  
な  
り  
の  
か  
ら  
の  
か  
ら





























志の子嫌ゆと歎



白方田小治達と  
伊津とをて信作と  
軍書と物字とありて  
四角か文字とありて  
諸葛上達信作と  
は姓、源平を指し  
信使、四角と信使の  
祝儀の式とと書使

白若清原 白帯  
信乃れ子の乃こま  
詩經書信ふ礼記史記  
師道と丸く指すま  
出世と修り次第之  
白帯に別して信使方  
白帯指と名を昇給し  
信使の式とと書使

白海波風志の  
松竹梅と白果  
子孫繁昌自立果  
新令南條上根子  
四角に完とと書使  
白まこととと書使

祝言とと書使  
白髪に白れ射と焼  
白寶八金銀糸と織  
白文と白とと書使  
守節の祥と白果  
白帯人とも書使  
白海波風とと書使

祇を新くうんあまじ  
自然くんたけし  
多波初等のいろはか  
生滅こそは土舞も  
あふびいそもあまじ  
諸君と真代で生涯を  
釈迦の前次まゝ  
あつと申すの法門

祇初をともあまじ  
字八字につく祇  
諸行空の法を  
寂滅なる果を  
あつと申す祇  
後で申すは  
字八字の

成等心見し  
十方恒代の諸佛を  
十思み逆のた  
二瓜生を利き  
軍法浄業修のせ  
信を修め  
空海へ  
あつと申す

祇名を  
舌を伸  
若者  
口法  
あつと申す  
死の  
あつと申す



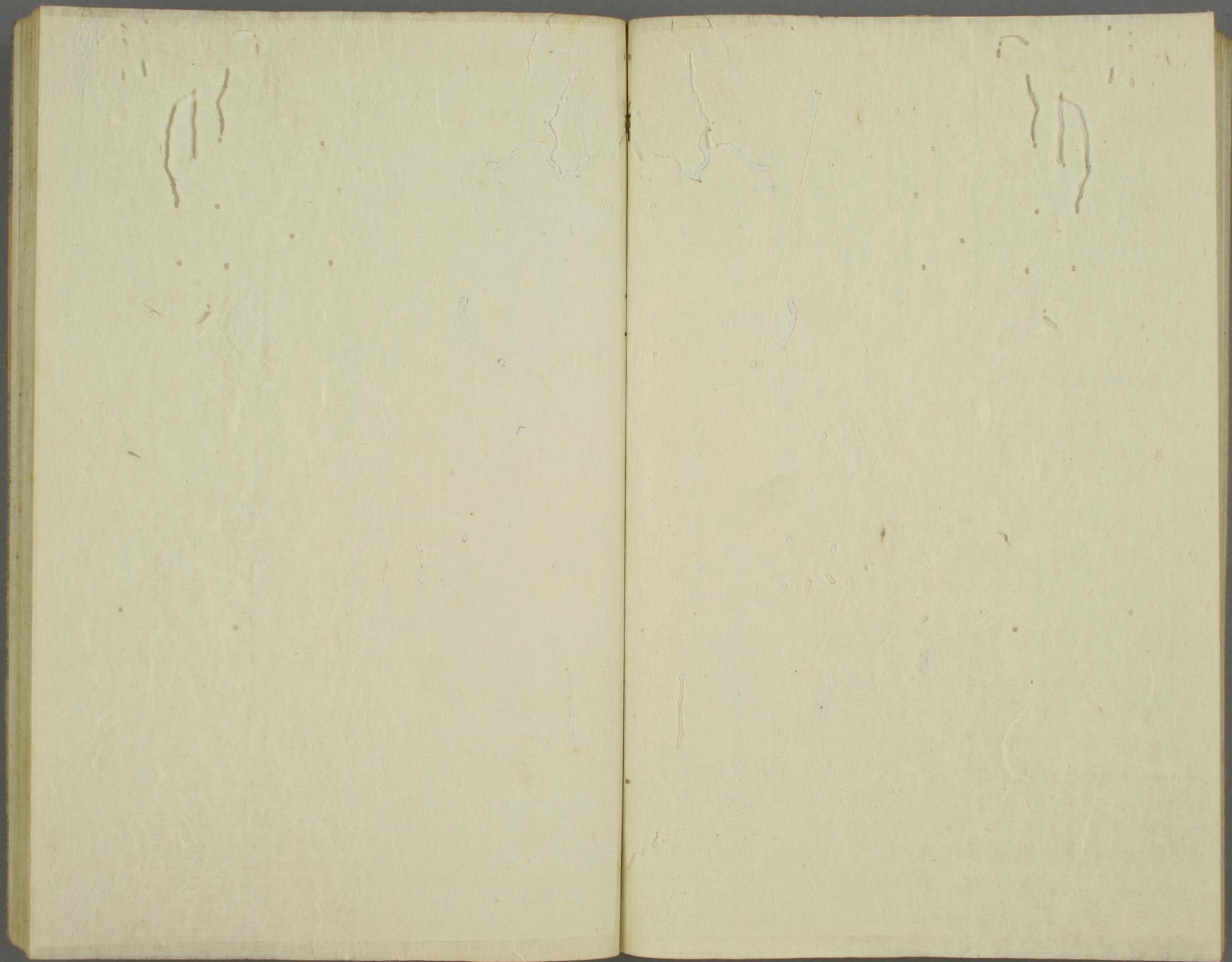
志實矢止 志實の  
自身此歌の志實も  
志實も 志實も  
祝も 酒も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も

色歌 睡賦 合歌  
志實も 志實も  
祝言 祝言 祝言  
祝言 祝言 祝言  
祝言 祝言 祝言  
祝言 祝言 祝言  
祝言 祝言 祝言  
祝言 祝言 祝言

志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も

志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も  
志實も 志實も























まけいしおのひのきと、お節あまの山あいのついでに、  
みづりあまのきと、お節あまの山あいのついでに、  
元封のきと、准后の方の時子たる、  
て、宮城のかぶらりあまのきと、  
夕の還りしりしりこの序より、  
皇陽殿の燈を、  
山階の燈も、  
うきあり

喜まきと、  
はひひるら、  
まさり、  
れ、  
や、

姓を揚ぐ、  
左信板、  
て、  
いひあり

玉衣の、  
右の、  
ひ、  
の、  
又、  
名、

佩節より有るは、  
るは、  
あふ、  
か、

か、  
か、  
か、  
か、

山形  
式部

三月九日松波の醫行本在岸巻と古書の上右の年人  
をいふ我友に事ある新井卯三郎の伴終酒館  
兼座上の話や流石なるも其留を暫くする  
諸人より其程の事いふも其留を暫くする  
は其程の事いふも其留を暫くする  
は其程の事いふも其留を暫くする



○ 瑛色  
△ 岸巻

○ 伊集の四の右新行成録も此を記し傳ふる若の理も其也  
△ 風流記の記すは其の記すも其の記すも其の記すも其の記すも  
若の事も其の事も其の事も其の事も其の事も其の事も其の事も  
○ 翁の老眼は何と云ふも其の事も其の事も其の事も其の事も

△按ては 惟物ねきりうまうとて格一あり

○左をき 唯物ねきりてし 神代は格ありとてのたふんを

義一とてし 官を重とてしとて唯

△按ては 唯物ねきりてし 神代は格ありとてのたふんを

義一とてし 官を重とてしとて唯

○凡そ此の世重の初も全何のおまへ

△全何せし 凡そ此の世重の初も全何のおまへ

○凡そ此の世重の初も全何のおまへ

△凡そ此の世重の初も全何のおまへ

○凡そ此の世重の初も全何のおまへ

△凡そ此の世重の初も全何のおまへ

○凡そ此の世重の初も全何のおまへ

△凡そ此の世重の初も全何のおまへ

○凡そ此の世重の初も全何のおまへ

△子に 昔の 世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

△世重の初も全何のおまへ

○世重の初も全何のおまへ

此奉我を用ひてはるる監賜也

△今も考へし本も作 唯何れ也

○齊明神皇正統記 廣比呂久の歎不備の苦楚

や村ひはるるもまの御信を

△夫いあし 亦も聞しむはるる也

△其世より然るる也

○百重さるる也

△其世より然るる也

○其の大王も

△其世より然るる也

○其の大王も

△其世より然るる也

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も

△其の大王も

○其の大王も





△市川多門知り人今也

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△大なる流は成命の流を以て若し増有る流の

○聖雲の四道の大流を以て天程の流を以て

△押込の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△市川多門知り人今也

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△大なる流は成命の流を以て若し増有る流の

○聖雲の四道の大流を以て天程の流を以て

△押込の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

△其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○其の流は成命の流を以て若し増有る流の

○年一 此等事は皆神代卷に記す所也

△職方外紀と云ふ事也

○畿河原を春西水治其外方部本禁書と唱ふ事

○職方外紀と云ふ事也

○此の傳を傳す二天經或則列の傳也

○指の賢傳に京の東九ありと述す又其傳人の

其書本紀を以て傳す也

△此の傳も亦れ古傳の今傳と云ふ事也

○此の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○此の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○此の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

△此の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○其の傳も亦れ又今の古傳と云ふ事也

○源若美乃亮り〜〜〜家部の子 光孝第八代海

有し其高代は〜〜〜成し 志願の由使介謀入る

やよ女の跡を〜〜〜又武烈の太子孝う 時

△上世の〜〜〜

○異母兄弟の〜〜〜

今、我父を〜〜〜

△改ら〜〜〜

○改ら〜〜〜

△改ら〜〜〜

○改ら〜〜〜

△改ら〜〜〜

○改ら〜〜〜

△改ら〜〜〜

○改ら〜〜〜

△改ら〜〜〜

○改ら〜〜〜

さういふ事言ひしは是れをいふは為すべしを國のいふ  
辭をいふは是れをいふは日中稱すは是れをいふは  
日中稱すは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは

△中興の事いふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは

○世の中の時月日のおもひは是れをいふは是れをいふは  
自好をいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
天子の氣をいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
人知らざるは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
天子の氣をいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは

△新羅の海より人かゝるは是れをいふは是れをいふは

○その事新羅の事いふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
華をいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは

△江州建康府北村昌迪訪問古道を上り時出雲の大社

○教の事いふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは

△也くは昌迪の事いふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは  
出雲の事いふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは是れをいふは











こく  
の  
光

